

圏外のアンテナ

[チャンネル権]の巻

今年も「3・11映画祭」が開催された。会場はオタクの聖地、秋葉原の北の、廃校になった区立中学校。かつて教室として使用されていたスペースで、のべ7日間、震災に向き合う28作品が、上映された。

わたしが見たのはチェルノブイリ原発から3キロ、プリチャピ町民の想いを描いた「故郷よ」。そして知識人へのインタビューをつないだ「サバイビング・プロGRESS（進歩の罠）」。

終演後、メイド服姿の女の子が客引きを繰り返す道を、とぼとぼ駅に向かって歩きながら、このままではダメだと心から思った。

と同時に、故郷でたくさんの方が長い間、避難生活を強いられている現実があるのに、映画を見てようやく、物事を考えるのか？ と、自分自身を情けなくも思った。

痛感したのは「世代」という事である。原発を作ったのは、わたしたちの前の世代の人たちである。実際物心ついた時、原発はすでに輝かしく存在していた。

10代最後の夏休み、双葉の友だちのところ遊びに行った。「山の上に、鉄塔の先が光ってるでしょ？あれが原発だよ！」などと教えられながら、プカプカ波に浮いていた1日は、幸せな記憶の一篇である。

だが、時は流れた。今、決断の責任を持つのは、わたしたちの世代なのだ。

子供の頃、ドリフの番組は見せんと、父親に約束させられた。昔は、テレビに限らず、あらゆる事を、大人たちが決めていた。

だが、今は違う。次の世代のために、将来を選ぶ「チャンネル権」の使い方を間違っではいけない…。

映画の中で霊長類学者のジェーン・グドールは語った。「地球上で最も知的な生物であるはずの人間が、どうして、唯一の故郷を破壊するのでしょうか？」と。

=2015年3月17日掲載=

